あぶ小だより

須賀川市立阿武隈小学校
第４５号
令和２年１２月２５日
☎　７６－５１３５

長い２学期が終了　～ご支援ご協力ありがとうございました～

８月１９日（水）から始まった２学期が，本日１２月２５日（金）で終わりました。長い２学期でした。保護者の皆様には，これまでのご支援ご協力に感謝いたします。ありがとうございました。

２学期は，１学期にできなかった「授業参観」や「運動会」が行われました。どちらも制限させていただきながらの開催となりましたが，子どもたちの活動の様子，学習の様子を見ていただきました。まだまだ予断を許さない状況下ですが，３学期も子どもたちの学びの場を保障できるよう願っています。

本日お渡ししました通知票は，「個別懇談」で話し合ったことをもとに見ていただき，お子さんのよいところ，頑張ったところ，今後頑張るところなど３学期に向けて前向きになれる話し合いをするよりどころとしてください。

冬休み中けがなく過ごし，年末年始が家族のよい時間となることを祈っております。体調管理を普段以上に心掛け，３学期１月５日（火）に元気に登校してほしいと思います。

表彰　～おめでとうございます～

＜税の標語＞
特別賞　６年　安藤　史織
入選　６年　秋山　亜子
入選　６年　佐々木　驍
入選　５年　水野　雄登

＜須賀川市文芸大会俳句の部＞
特選　１年　渡辺　暖真
秀逸　４年　安藤　滉泰

＜阿武隈川上流児童図画コンクール＞
優秀賞　３年　穴澤　泰依

＜歯科衛生書写コンクール＞佳作　６年　有我　ひかり

＜歯の優良表彰＞
６年　鈴木　七灯
森　心花
鈴木　心優
鈴木　果乃
有我こころ

校内ばしょう賞　十一月

特選　三年　山田　芽生
赤りんご
切ってよろこぶ
蜜みっけ

入賞
一年　まつざき　ちかさ
ねころんでおちばのふとんきもちいい
一年　いしい　しゅら
さつまいもゆげでめがねがくもったよ
二年　いとう　外四
やきいもで思いだすのはサザエさん
二年　すず木　せな
ねえむしさんおちばのふとんあったかい
二年　正木　あおと
秋がきて赤く黄色くそまる山
三年　穴澤　泰依
木の葉たち風にふかれてよーいどん
四年　熊田　らら
やきいもや兄弟げんかのもととなる
四年　竹田　妃那
しもやけで手がかゆくなる冬の時
四年　堀井　琉稀
もりのなかもみじがきれいたからもの
五年　齋籐　飛雅
つたもみじみきを使って空へ行く
五年　瀧口　颯人
おちばたち風にふかれてレースだな
六年　緑川　衣真
おどりゆく風にゆられてもみじの葉
六年　有我　まひろ
落葉たちかぜにふかれてたびをする
六年　根本　柊弥
冬の空　夜空の星が　美しく

感染症対策へのご協力のお願い

３学期に入っても、コロナ感染症対策は続きます。発熱等の風邪の症状が見られる場合には、症状がなくなるまで自宅で休養していただくようお願いいたします。この場合、「出席を要しない日」となります（欠席とはなりません）。

募集のお知らせ　市教育委員会では，特別支援教育支援員の募集を行っています。幼稚園，小中学校の教員免許有資格者の方が応募できます。希望の方や知り合いの方がいれば校長まで問い合わせください(随時)。

学校の活動の様子はホームページでもご覧いただけます

今からでも遅くない「アタッチメント」
～非認知的な心の育成～

２０００年，ジェームズ・ヘックマンは，ノーベル経済学賞を受賞しました。研究内容は，「教育経済学的研究」で，『人の生涯の特にどの時期に，教育にしっかりと（公的な資金も含め）お金をかければ，最も効果的なのか』というものでした。みなさんはどの時期だと考えますか?

ヘックマンが出した結論は，「就学前の乳幼児期における教育の投資効果が絶大」というものでした。この効果のもととなるのが，**「非認知的な心の育成」**ということです。「認知的」と反対ですから，言葉が読める，書ける，計算ができる，意味が分かるということとは別の心の働きということになります。

では，「非認的な心の力」とは，何を言うのでしょうか。それには，二つあります。一つは，「自己に関わる心」。もう一つは，「社会性に関わる心」です。

みなさんは，自分に対しても他人に対しても「絶対的な信頼の感覚」は持っていますか。

・人って信じてよかったのだな
・助けてくれるのが人なのだな
・自分って人から受け入れてもらえる存在なのだ
・自分って愛してもらえる存在なのだ

このような感覚をいいます。つまり，信頼され愛されるということに関する確信です。乳幼児期においてなによりもまず獲得されなくてはならないものは，こうした自分と他者に対する基本的な信頼感だというのです。これを土台として「非認知」的な心の要素が積みあがるのです。

非認知能力は乳幼児期にアタッチメントを通して形成される

親子関係の中におけるアタッチメントが，自分と他者に対する基本的信頼感の発達にとりわけ大切な役割を果たします。アタッチメントとは，「くっつく」ということです。不安なときに，信頼できる大人にしっかりとくっつく。確実に守ってもらうという経験の蓄積が，信頼の感化を獲得していきます。このような親子関係を通してアタッチメントを経験した子どもは，困ったときに様々な他者に対しても素直にシグナルを発し，現実に彼らから助けてもらえる確率が高いといいます。

一方アタッチメントが不十分な子どもは，その逆となります。怒りの表情だけは敏感になり，普段の真顔が怒りの表情と感じてしまう。つまり，自分に対して温かいケアを施してくれるような他者が目の前にいたとしても，関心を寄せてくれない，悪意を持っていると誤って読み取ってしまいがちなのです。

アタッチメントは，他の非認知的な心の要素の発達をも導き出す

「自律性」　親などの大人を「安全基地」とすることで，危急時以外は不安から解放されていられる分，その感覚に支えられて「一人でいられる力」，すなわち自律性を身に付けます。

「自信」　「一人でいられる力」は，自分の持っている力に対する根源的な自信の形成を自ずと伴っています。能動的にシグナルを発しくっつくことによって得た経験によって**「自分には他の人を動かすだけの力がある」という確かな自信**（自己効力感）をもたらします。

共感性，心の理解能力の発達　子どもはアタッチメントによって，**親をはじめとする他者の対応を「鏡」として**，そのときの表情と自分の中で起こっている思いの感覚をそこに見ます。子どもが持つ感情（不安，恐れ，喜び，痛みなど）に親が寄り添い，同調することは，子どもの共感性や思いやり，自他の心などを的確に理解する力の発達に大いに寄与しているのです。

当たり前のことをごく自然に

子どもは,不安なときに親などの大人にシンプルにくっつき安心感を得たいと思っています(アタッチメントを欲している)。親は，子どものアタッチメントにごく自然に応えていく中で人の生涯にわたる心身の健康や幸福のカギとなるもの（非認知的な心の力）が，豊かに立ち上がってくることの自覚が必要です。ごく自然に応えるだけでなく**親の反応が子どもの「非認知的な心の力」を育んでいるという自覚**が必要です。

乳幼児期に効果が絶大ということですが，私は，初等教育時期もまた，等しく絶大であると考えています。特に低中学年の子どもにとって，アタッチメントは必要です。子どもが欲しているときは，決して離れないで抱きしめてください。親のその対応が子どもの心を育みます。とても大事な教育的投資です。

学校の活動の様子はホームページでもご覧いただけます